

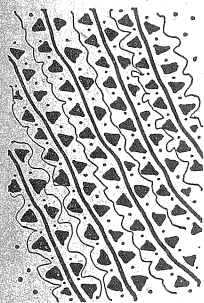
文部時報

第1194号

昭和51年11月

基盤文化と洗練文化……………川喜田二郎	2
▷座談会◁	
参加する文化活動の推進……………	10
（出席者） 河北 倫明・福原 信夫・小長 久子 内木 文英・宗 知信 ＜司会＞ 柳川 覺治	
地方の児童文化運動……………栗原 一登	26
市民の手で花ひらく北九州市民音楽祭……………進 正二	33
地方オーケストラ……………五十嵐 誠	40
＜解説＞	
子ども向けテレビ用優秀映画製作奨励金 交付制度について……………文化庁文化部芸術課	46
複写複製に関連する著作権問題について ……………文化庁文化部著作権課	52
国語施策の現状について……………文化庁文化部国語課	58
〔現地ルポ〕	
福井県陶芸館を訪ねて……………田中 照久	66
〔随想〕	
回想・中秋の月の夜……………朝比奈 隆	72
~~~~~	
〔文部省の窓〕	
昭和52年度文部省所管予算の概算要求について ……………大臣官房会計課	76
~~~~~	
〔所轄機関等紹介⑩〕	
国立室戸少年自然の家……………斎藤伊都夫	80
〔連載第3回〕	
人物を中心とした体育・スポーツ郷土史＜高知県＞ ……………近藤 勝	84
書 評 ……………	71
文部省重要通達一覧 ……………	95

表紙 小林 敏子 カット 須貝夫早子



随 想

回想・中秋の月の夜



朝比奈 隆

周囲の空が真黒にみえるような白く大きく光る月であった。星は全く見えない。

昭和二十一年九月十五日、澄みきった満州の夜の空である。奉天駅引き込み線に機関車を外されて横たわる無蓋貨車の列の上に三千の日本難民が黒々とうずくまっていた。

その前夜、私達はあわただしく追い立てられ新京郊外の駅でもない線路上でこの列車に乗せられた。赤児を背負い両手に大きな包みをさげた女、両手の他に首の前と後に鞆を吊り上げた男達、自分でも持てるだけの荷物を背負う子供達、ぼろ屑のような異様な行列が黙々と収容所からの暗い通りを歩き貨車のまわりに群がった。貨車は無蓋であるだけでなくフラットという車輛などを積むための縁もない板のようなものだった。

私達はまず中央に荷物をまとめ、その周りに子供達を、大人はその外側に坐ることにした。そして拾い集めた角材や薪のようなものを車台の周囲の穴に差込みロープを結び合せて張り渡した。背丈より高い満鉄の車輛に一人ずつ押し上げ、よじ登ってほっと一息ついたのはもう夜半であった。

列車が動き出して暫くすると雨が降って来た。冷たい秋の雨であった。ああと悲しい嘆声があがった。私と妻とは膝をつき合わせるように向い合って荷物に腰をかけ、足の間に三歳になる長男を坐らせ、有るだけの毛布やコートなどを炬燵のように上からかけた。それがおさない生命を守るため私達のなし得る必死の方法で闇を走る風も顔や襟元にかかる雨も全く覚えがなかった。長男は毛布の下で機嫌よく何か言っていたがやがて寝入ったようだった。

長くてくらしい夜の中を列車は少し動いては止りまた動いた。やがて雨はやみ、夜が明けた。草原の彼方に太陽が上ると、あつという間にまばゆい程の明るい秋の日射しであった。みんなが濡れた毛布やふとん等を荷物の上に並べて乾かし携帯の食糧を食べ水をのんだ。長男は何事もなく明るい笑い声を立てた。たどたどしいながら私達は今南へ向って走っているという思いが胸をふくらませた。目的地である錦州の港には私達を日本に連れ帰る船が待っている筈である。それが幾日さきの事かは知れないが兎に角日本に向って近づきつつあるのは確かであった。

* * *

それは時間が停止した日々のように思えた。ハルビン交響楽団指揮者として親子三人起居していたヤマトホテルに自動小銃をかかえたソ連軍降下部隊の迷彩服の兵士達が姿を現わした時から時間の連続はすべて断絶した。

降伏式場から連れ去られてそのまま帰らない将校達、総領事以下の館員、そしてソ連軍に引き渡すための砲車を、焼けるような夏の日射しの中で裸になって懸命に油布で磨いた若い兵隊達、そして市中は日毎に混乱の度を深め、私達は「法の保護外」に置かれた。

この古典的な法律概念が現実になったのである。誰でも白昼公然と街路上で私達の持物を奪うことができた。恣に日本人を犯すべからずという蔣介石の指令に従ったのは中国の民衆だけで第三国人やソ連兵は全く自由であった。

その時辻馬車を雇って来て荷物を積みこみ長男を片腕に抱き、せき立てるように私達夫婦をホテルから自分の小さな住いに伴い帰ったのは、リム君であった。

それまでハヤシ君と呼ばれていた林元植君は一年程前から私の弟子兼助手のような関係にあった温和な青年であったがその日の彼の口調や態度には否とは言わさぬ気迫の

ようなものがあり、今すぐにホテルを出て自分の部屋へ来るよう、一切口をきかないよう、絶対に部屋の外へ出ないよう指示する彼の顔は緊張に青ざめてさえた。

それから幾日、一つしかない彼のベッドで親子三人息をひそめるようにして過した。足音が近づいて扉がたたかれる。戸口に立った林君が朝鮮語で声高に何か言い合っている。呼吸を止めて肩をよせ合う長い時間であった。林君自身の命もその瞬間にかかっていたのであった。

嵐は過ぎて小康の日が来た。十月には中国政府軍の米式装備部隊も進駐、市政府も開かれた。日僑處理所もできて二万の在住日本人の「鳥籠の中の生活」が始まった。

ホテル住いで売り払う身の回り品もすぐに尽きた私達は二、三人達の好意で松花江に近い中国人住宅の一室を借りてひっそりと日を過した。早くも雪の降り始めた暗い空の下を貨車に積まれた日本軍の捕虜が、毎日、幾列車も南から北へ運ばれて行くのを私達は橋の上からただじっと眺めているだけだった。

生活の貧しさと伝染病とに追い詰められるような長い冬の間中、みんな何となく春が来れば日本へ帰れると信じて

事で堪え生きていた。しかし翌二十一年四月二十九日朝、突然ソ連軍の代りに共産八路車が市内に現われ政府軍の姿は消えていた。私達の全く知らないところで政治の舞台は大きく回転し戦勝者同志の冷たい争いが始まったのだった。

帰国の希望は急に遠くへ去ってしまったがそれでも今にアメリカ軍が救出に来てくれるとか、米軍のマークをつけた飛行機を見たとかいう噂や流言を心頼みにして私達は待った。陸続きの祖国を持つだけに矢も楯もたまらず、林君は五月の或る朝、歩いてでも帰ると荷馬車に身を托してハルビンを出て行った。

八月中旬になって突然日僑送還が告示された。兵隊ズボン、モンペ、リュックサック、鞆、水筒と異様ないでたちの群れが毎朝駅の構内に集められ、貨車に積み込まれた。老人と女と子供の多いみじめな群れであった。

途中、中共軍と政府軍との前線である松花江近くで線路上を喘ぎながら荷物を背負い子供の手をひいて何キロも歩いた。

銃座のある鉄条網を越えて爆破された松花江鉄橋の下に、政府軍の兵士が晴天白日旗章の入った渡河用鉄舟に乗

っていた。「三途の川を逆に渡っている感じがすな」と誰かが言った。忘れていた笑い声が鉄舟の中に湧いた。

そうしてその翌朝、我々を乗せた貨車の列は新京の郊外の仮駅に着き旧日本人住宅街跡の收容所に入った。新京では殆どの在住日本人の引き揚げた後であったが新聞や放送関係の顔見知りの人もかなり残っていて行動は全く自由な二週間を窓ガラスも曇もない住宅の板の間で暮した。

* * *

そうして九月十五日も暮れて中秋の月が高く輝く頃奉天に着いたのだった。命令によって今夜はこのまま置かれ明朝收容所の移動というので水を汲む場所を尋ねる者、用をたしに貨車をとび降りる者、男女の別もなかったが、静かな夜と美しい月の光はいくらか私達の気持ちを明るくしたようだった。そこへ難民相手の行商人がやって来て中秋を祝う月餅を買わぬかという。月見など考えた事もなかった私であるが何となく心がなごむ思いで乏しい財布の中から一個だけ買って妻と長男と三つに分けた。声をあげて喜ぶ我が子を眺めながらそれを口へ運ぶ妻、私の口の中に甘さと油気の入り交った月餅の味が香ばしく広がって行った。

* * *

文中のリム君は、現韓国芸術院会員、文化功労者、林元植君である。あれから三十年の我々の歴史も平坦なものではなかったが、中秋の月を見るにつけ、現在もお互いに音楽家として芸術の道にたずさわっていることは本当に幸せなことであると思う。

(大阪フィルハーモニー交響楽団常任指揮者)



〔特集・生涯教育と社会教育〕

生涯教育と社会教育

〔座談会〕

社会教育の新しい方向

〔出席者〕

萩原 祥三・日野 敬三・貞閑 晴
山本 恒夫・八司会ノ湯上 二郎

家庭教育に関する国際的動向

藤原 英夫

地域青少年のふるさと運動

西川 黎明

中央沿線テレビセミナー

矢萩 操

母と子の公民館活動

山本 松雄

△解説△

情報提供事業について

猿橋 岩雄

△資料△

図説社会教育の現状——昭和五十年指定統計

社会教育局社会教育課

〔現地ルポ〕

金沢大学大学教育開放センター

古野 有隣

編集後記

◇郊外に住む友人宅を訪ねた帰り、夜のホームで電車を待っていると、どこからかコログの音が聞こえてくる。層の上では立冬も過ぎ、風も冷たい。その風に吹き消されそうな、かぼそい寂しい声である。秋に生きた昆虫と、冬を感じさせるこがらしとの組み合わせは、コンクリートに囲まれた都会で生活する者にも、季節の移ろいをまのあたりに感じさせてくれる。ふだん、気にも留めなかったり、無意識でいるものの中に、案外新鮮な感動がある。コログの声は編集子にとって、そんなもののひとつであったようだ。

◇この秋、「シヤガール展」や「ゴッホ展」をはじめとする美術展がすばらしい人気を呼んだ。東京国立近代美術館では、開館時間を延長しなければならなかったほどである。そして特筆すべきは、いずれも若い人の入館者が多かったということだ。若い心が美しいものに触れて感動する、ということの意義は大きいと思う。

◇美術展や音楽会、自然の偉大さや美しさ、そのようなわれわれの生活に新鮮な感動を与えてくれる刺激剤々々をおりにあることに補給するよう心がけていたものだ。

(U)

MEJ 5194 月刊 「文部時報」 11月号 第1194号

文 部 省

昭和51年11月5日 印刷
昭和51年11月10日 発行

著作権
所 有

発行所 株式会社きょうせい

本 社 東京都中央区銀座7丁目4番12号
(郵便番号 104)
(営業所) 東京都新宿区西五軒町52番地
(郵便番号 162)
電話 東京(268) 2141 (代表)
振替口座 東京 9-161番
印刷所 株式会社 行政学会印刷所

定価 180円 (〒33円)

年間購読料 2160円 (〒4円)

* ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます。
* なお、購読の申し込みは、直接営業所またはもよりの書店をお願いします。